

## 調査報告

# 慶尚北道羅北の筏船とワカメ漁

— 韓国漁業調査ノート 1 —

香月洋一郎

### 一 羅谷のむらへ

#### 韓国の筏船

一九九六年の五月上旬、釜山の水産業史研究所長の朴九秉（パク・クイヨン）先生のお誘いで、慶尚北道蔚珍郡の羅谷（ナコク ナゴ）という漁村に出かけた。このむらは現在でも漁に筏船を利用しているということで朴先生が調査を計画されたのだが、この時期は筏船でのワカメ漁のほとんど終わりの時期だった。

五月上旬までに調査に行かないと今年の漁は終わるかもしれない、との連絡を四月下旬に朴先生から受け、私が釜

图1-① 羅谷の位置(矢印) 『最新版 慶尚北道全図』(成地文化社)より



山に入ったのは五月九日。翌十日朝、釜山水産大学校の前で朴先生、それにその教え子の李相高先生（釜山水産大学校助教教授 資源経済学）と待ちあわせ、李先生の車で東海岸を北上する。羅北は直線距離にして釜山から二百キロほど北にある。

私は特に漁船についての勉強をしてきたわけではないのだが、朝鮮半島の筏船については以前から見たいと思っていた。それは、私が教えを受けた宮本常一の次のような指摘による。

「もとより海民といっても、そのはじめから海を漂泊しつづけていたとは考えない。もとは河川のほとりに住み、すでに稲作農耕技術を持っていた者が、筏などで川を下って洋上に出て移動したのもであったであろう。もともと筏船は河川で発達したものだと思われるが、日本へ稲作文化を最初にもたらした人びとは、筏船を利用したのではなかったらうかと考える。家族も同行できるには、それほどゆとりのある船でなければならぬ。船住居のできるのには筏様式の船であり、男も女も船に乗って移動して来たもののように、弥生式文化の遺跡を見ると、九州では遠賀川や筑

後川をさかのぼったところに多く、近畿地方でも大和川や淀川をさかのぼったところに大きな遺跡がみとめられる。(中略) しかも、稲の日本列島への普及はきわめて速かった。それは船によって海を移動していったからであろう。今日弥生式遺物の中には筏船はない。絵画も埴輪も残していない。しかし筏は解体すると棒になってしまふ。原形をのこすことがほとんどなかったのであろう<sup>(1)</sup>」

韓国における筏船の調査は、これまで出口晶子氏<sup>(2)</sup>や野村史隆氏<sup>(3)</sup>などによってなされている。出口氏は、筏船とその漁撈について、東シナ海全体のなかで把握されようとし、野村氏は濟州島の筏船についてこまやかなレポートをあらわされている。

濟州島の筏船について、『韓海通漁指針』(葛生修吉著、明治三十六年、東京黒竜会出版部)には次のように記されている。

「濟州島に一種の筏あり、凡そ疊四丈敷許の面積に木材を組み、更に其上に約壹尺乃至壹尺五寸位の高さを有する柵を作り、之れに竹若くは粗朶を以て編みたる簀を敷きたるものにして、両三人乗り組み、之れを磯魚漁に使用すること盛んに行はれ、沖合壹里位迄漕き出し、錨を投して終日之れに従事するもの其隻数頗る多し、然れども操縦に適せざるが為めに、偶々台風起ることあれば、往々他方に漂流するの難を免れず、古来我が対馬辺に漂着したること属々<sup>(マコ)</sup>人の耳にする所なり、又た之れと略ほ同様のもの江原道長鬱里辺にても使用せらる」(同書四一七ページ、なお引用文中の傍点は原文のまま。ただし一部の漢字は旧字体を新字体にあらためている。文中の江原道長鬱里とは現在の三陟郡遠徳邑莊湖里である旨、朴九秉先生より御教示を得た)。

引用文の末文に東海岸にも筏船がみられる旨の指摘があるが、一九八〇年代においても韓国の東海岸から鬱陵島にかけて筏船が使われていることは出口晶子氏が報告されている<sup>(4)</sup>。

## 慶州から浦項へ

五月十日の朝、李先生の車はまず京釜高速道に入り慶州に出る。車の窓から慶州の古墳や博物館の建物が見える。私はこの地方ははじめてではない。一九七九年の初夏、このあたりを貸自転車で何日も走っていた。その時は釜山から列車で慶州に着いた。釜山で列車に乗ると、すぐに一人の僧が私に日本語で話しかけてきた。

あなたは日本人か。それならひとつお願いがある。日本の岩波文庫から『頓悟要門』という本が出ているはずだ、帰国したらさがして送ってもらえないだろうか。

その僧は、慶州郊外の古刹石窟庵の僧で崔能了と名乗った。七十九歳であるという。本来仏国寺駅で降りるのだが、宿の世話をしあげよう、と一緒に慶州駅で下車してくれた。安い宿を、という私の希望通り、彼は素泊り千五百ウォンの旅人宿を捜してくれ、私はそこに四日ほど滞在した。

帰国するとすぐに『頓悟要門』を捜し、石窟庵に送った。まもなく丁重な礼状が届いた。あれから十七年、慶州の街は驚くほどの変わりようをみせていたが、博物館のたたずまいは当時のままだった。それを見るとすぐに崔能了師の風貌や自転車でもわった慶州郊外農村部の記憶が甦ってきた。

## 浜の筏

車は慶州から浦項方面へ向かう。浦項をすぎると車は海沿いの道を走る。定置網を干したり繕ったりしている人々の姿、迷彩色に塗られた海への監視舎、大きなカニ——この地の特産品——の看板などが次々と車窓を流れとぶ。蔚珍郡の役場に着いたのは十二時すぎだった。入口の特産品を展示するケースのなかにカニとワカメが展示されている。水産課は昼休みで誰もいない。私達も食堂で昼食をすませ、一時すぎに再び役場にもどる。

すぐに水産課の方が車を先導し案内してくださる。役場からさらに車で十六キロほど北上する。羅谷の集落に着く

慶尚北道羅北の筏船とワカメ漁



図1-⑤ 羅北の浜に干されているワカメ。漁の最盛期にはここ一面に干される。ビニールシートがかけられているのは使っていない空枠。この時期、漁はおわりに近づいていた



図1-② 羅谷のむら、戸数四十戸余り、民宿を営んでいる家もある



図1-⑥ 羅谷から釜山への帰路、熱海付近の売店で売られていたワカメ

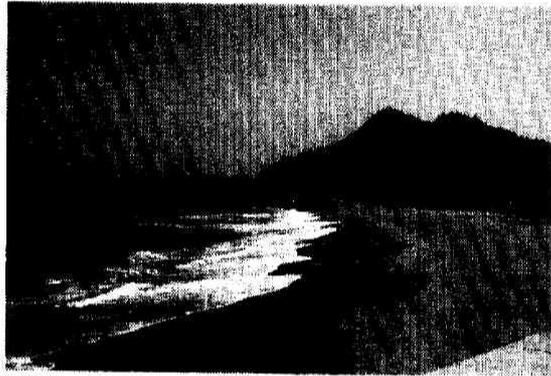


図1-③ 羅谷のむらのすぐ前の浜



図1-④ 六艘の筏がおかれて  
いる浜

が、そのまま通り抜け浜に出る。浜のすぐ北に小さく入りくんだ磯があり、六艘の筏船が磯と磯との間の小さな浜に引きあげられていた。そこにむらの長老、南斗七さん（この時七十九歳）と里長の朴完教さんが来られた。私達は筏の大まかな実測の後、近くの食堂でこのお二人から二時間半ほどお話をうかがった。

この時、朴先生は質疑応答をその都度私に日本語で話してくださいました。その聞取りの概要を以下に示すが、これは朴先生が訳して下さった内容をもとにしている。とはいえ、そのとりまとめの責任は一切私にあることを付記しておきたい。

なお、以下の章で黒丸（●）で始まる文がお二人からの話であり、その文より二文字さげ、白丸（○）を付して記したものは、その内容に関しての私のただし書きである。

## 二 磯漁の船としての筏

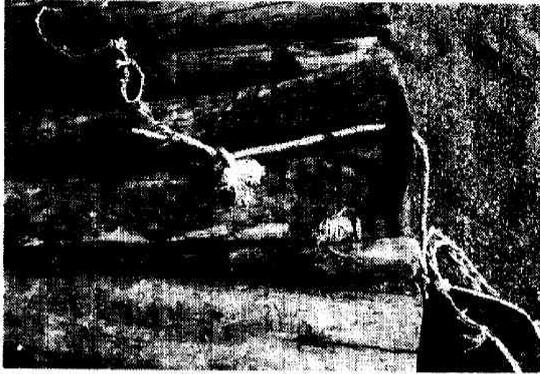
### ワカメの生育する岩

●羅北では筏船のことをテカレ（叫外叫）と呼ぶ。韓国ではトーマッベ（토말배）と言うことが多いが、この呼びかたはこのむらでは用いなかった。現在この近辺で筏船はここでしか使われていないと思う。もと八隻あった羅北と同じ漁村契に属する姑浦（こつぽ）に、二十年ほど前まで二隻あり、それとこのむらの六隻との計八隻であり、今使われているのはこの六隻である。いつ頃から使われていたのかわからないが、私（南斗七氏）が国民学校の生徒だった頃からあり、当時は今より多かった。

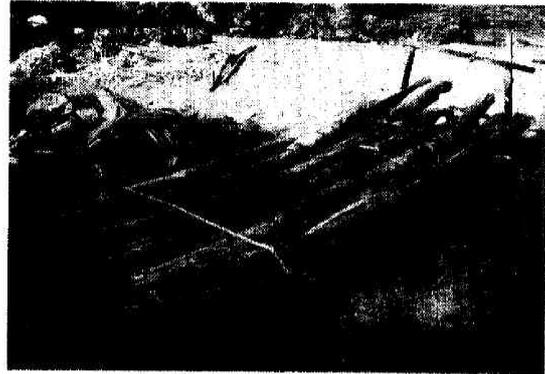
○テカレのテは筏を示し、カレは長い材木を意味するという。

○契（キエ）とは地縁あるいは血縁的關係に基づき、ある目的をもって組織された任意団体である。目的に従って分類す

慶尚北道羅北の筏船とワカメ漁



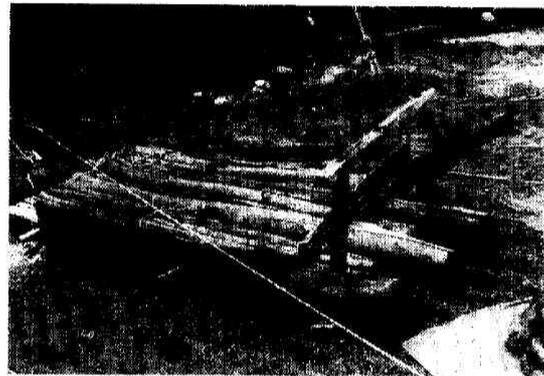
④



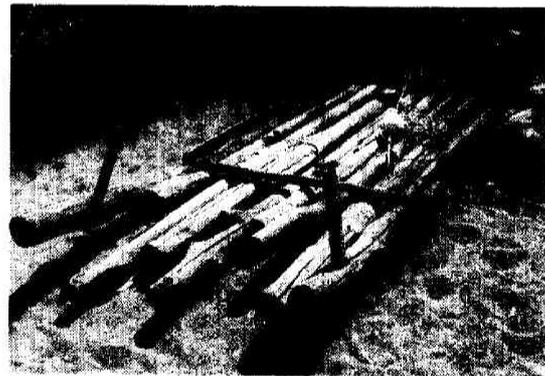
①



⑤



②



③

図2 ①～③羅谷の筏船 ④漁のないシーズンには解体されるため、筏の材には組立の時のために番号が刻まれている。⑤解体されている筏船の材、⑤の写真のみ洋亭

れば、公共事業を目的とするものから扶助、産業、金融、娯楽など多彩である。<sup>(5)</sup>

●このむらの筏船はほとんどワカメ（藪 クアク 斗）採りに使う。テンマ（これは韓語化している。テンマとは動力船あるいは大型船に搭載する小船のことだが、ここでは単なる小船を指す。日本の漁村でも多くはこの意味で用いられているように思う。）でも採れるのだが、筏船に比べてテンマは造船費がかかる。それに海上で揺れやすい。筏は揺れが少ないため作業が楽である。また、テンマは入った水をくみ出す手間が要るが、筏はその必要がない。テンマは作業や移動のため三人が乗りこむが、筏は二人であやつることができる。一人でもそう困難ではない。とはいえ東海岸のほとんどのむらはテンマを使っている。他のむらでなぜテンマが多用されるのかはわからない。テンマの利点といえば他の漁にも利用できることだろう。このむらの筏はほとんどがワカメ漁に使われ、しかもこのむらで最も大切な漁業はワカメ漁である。

●ワカメの漁期は三月中旬から長くて五月いっぱいまでで、天気の良い日が続く年は漁は早く終わるが、今年（一九九六年）は天気の悪い日が多かった。それに潮流のせいなのか、今年のワカメの質はあまりよくない。韓国の南海岸ではワカメの養殖をやっているが、この前の海は波が高く潮が早く養殖には向いていない。それだけに毎年の天気や潮流の様子に左右される。

●ワカメの乾燥は南風、西風のよく吹くところがいいのだが、その点ではこのむらは適している。干してはやく乾くほど色が黒く質のよいワカメができる。朝干してその日のうちに干し終えたものは品質が良い。

●海の深いところのワカメは日光が充分に届かず黄色がかったりしている。質がいいのは、その半ばが上に露出しているようなワカメで、日光を受け黒くなっている。姑浦のワカメはテレビでも宣伝していて品質は良いが、あのむらは山の地形的な条件で、ワカメが生い茂っている場所の海の日照時間がここより少し短いと思う。このむらのワカメのほうが質が良いのではないだろうか。

●むらには羅谷漁村契に属する十二のワカメの岩(藪岩)がある。これは、そこにワカメが育成する岩のことで、むらびとは毎年くじで、どの岩に自分があたるかを引きあて、同じ岩にあたった者がその採取を行なう。この十二の岩にはそれぞれ名がついており、以下それをあげると、1下九岩(하구암)、2中岩(중암)、3馬頭岩(마두암)、4内啓岩(내계암)、5柯致岩(가치암)、6潺察岩(잔찰암)、7升魚岩(승어암)、8外啓岩(외계암)、9自潜岩(자잠암)、10千億岩(우억암)、11馬作岩(마작암)、12沙作岩(사작암)となる。2の中岩とは、むらのすぐ前にあるためこの字をあて、3の馬頭岩とは岩が馬の頭の形をしているためこう呼び、6の潺察とは波が静かなことを意味し、波のおだやかな場所にこの岩がある。7の升魚とはボラのこと、ボラを指すソゴという言葉がなまってシングとなった。ボラがいる岩である。9の自潜岩とは、山のおちこみから続いて露呈しているところもあるが、多くは潜んであらわれない岩である。12の沙作岩は、むらの北寄りにあり、沙とは北の意味をもっている(これらの岩については図5、表1を参照)。

●昔、むらの功労者や年長者に、ワカメが付着育成する岩を与えたものだという話を聞いたことがある。

#### ワカメ採りの方法

●柄の長い鎌(ナツテ 낫)と木の枝に柄をつけたもの(カルギ 칼기)で筏の上からワカメを採る方法自体は昔と変わっていない(図9・10・11)。ただ昔はしばしば海面に魚の油をまいたという。浅いところは上から肉眼で見えるが、深いところは魚油をまくと海面は波がたたず鏡のようになり、下の様子がよく見えたという。これにはタコの墨袋もよく使った。かつてはこのむらはタコも多くとっていたのでその墨袋の入手は容易だった。墨は黒いのだが、そのなかに油分が含まれており、まくとよく見えたという。

●魚油はタラをはじめどのような魚でも油分のところをとって乾燥させ、木をくりぬいた器に入れ、筏に立てられた

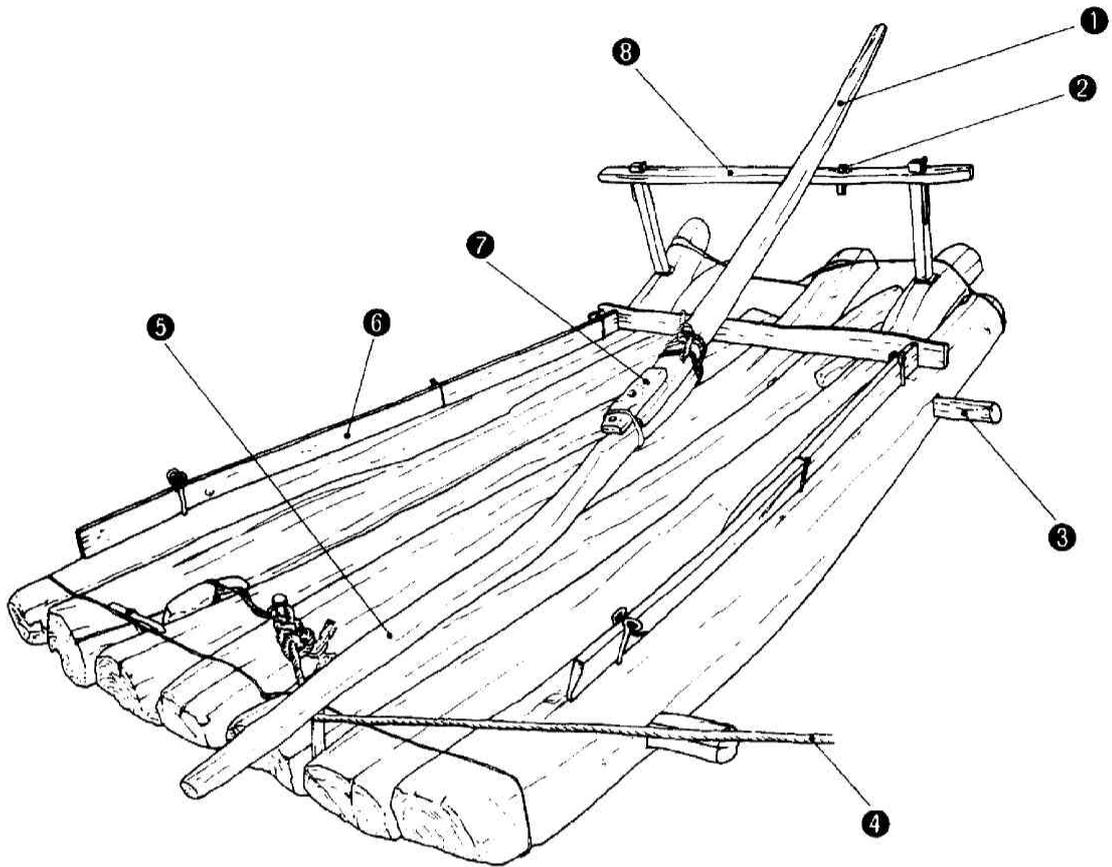


図3 筏の部分名称、櫓はノ（ㇿ）と呼ぶため櫓に関わる名にはすべて頭にノが付く ①②⑤⑦⑧がそれで、①はノーチチ（ㇿぢぢ）、②ノーチョッ（ㇿぢ）、③セキヨンイ（새경이）、④ゲソソジュール（계선줄）これは筏の係留ロープ、⑤ノウテ（ㇿ우대）櫓の腕の意、⑥テサム（떼삼）、⑦ノシッブ（ㇿ십）、⑧ノーパティ（ㇿ받이）いずれも羅谷での呼称 このほかにノーパティの逆側の端にノーチゲ（ㇿぢ계）という腕木が設けられる（図9参照）

棒(図9・17)にとりつけておく。この魚油は四十年ほど前まで利用されていた。それから深い場所のワカメの採取は海女に頼むようになり、このほうがはるかに能率がいいので魚油は使われなくなった。

○南斗七さんは四十年ほど前、タコの墨で試したことがあるが、底がよく見えたという。また、洪良浩(一七二四—一八〇二)の著した『北塞記略』という書に次のような記述がある由、朴九秉先生から御教示を得た。

「昆布海藿 生於海中暗嶼 惟明川地方及慶興之西水羅串有之 每三四月採 乘船中流 灑魚膏於水面 則洞見水底 乃以長木掇取」<sup>6)</sup>

●海女は、昔はこのむらにもいたのだが、今はいない。近くの竹辺(チュクハン 卒全)などから雇っている。そうやって来てくれる海女は五人ほどで、時には海女のうばいあいになることもある。海女は五十代から六十代のおばさんで、地元で海女として育った人もいれば、濟州島から移り住んだ人もいる。海女を雇った場合、その日のとれ高の二割を海女に払う。これは干した現物で渡している。

○翌日羅北に来た竹辺の海女は、コウ・スンボさんといって、かぞえ歳で六十歳のおばさんだった。濟州島の生まれで、父親は高校の先生だったが、自分は学校がきらいで十三の年から潜り、十七の年からあちこちに稼ぎに出た、と笑っていた。地名は忘れたが日本にも行った。竹辺に来て三十一年が経ち、現在は一年間で海女漁の稼ぎが一千万ウォンになるという。

●採ったワカメは重さをはかり、各岩のグループごとに共同で乾燥する。これを商人が買いに来る。二十枚を一束といい、これは三・五キロの重さがある。今年は姑浦で上質のワカメは一束八万ウォンの値がついていた。羅北のむらは、現在一戸平均して二百束分の収入を得ている。

●かつてワカメは漁協の委託販売にしていた。漁協が手数料をとり、その金を浜そうじの人手の賃金などにあてていたが、十年ほど前から自由に販売することになり、浜そうじの費用も出なくなり、むらの高齢化もすすみ、浜の維

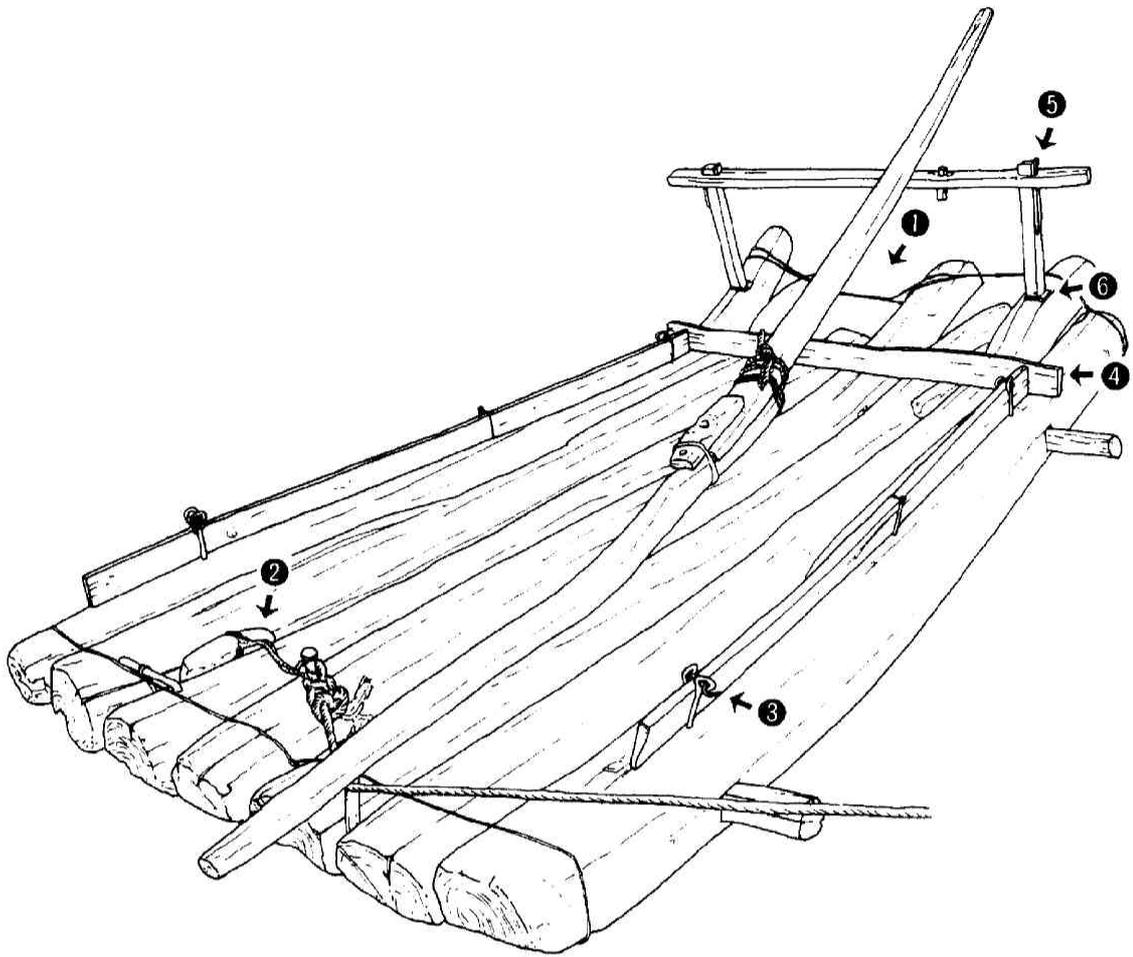


図4 筏の部分スケッチ ①②結合の補強はカスガイやハリガネを場所に応じてほどこしている ③④ワカメが流れおちるのを防ぐ棒、板材（杉が多かった）をハリガネと釘や金具で固定する ⑤⑥木材と木材の固定はクサビで停めとめゆるみを防ぐ ⑦碇は網に包んだ石か、むきだしの石をロープにつないで利用

慶尚北道羅北の筏船とワカメ漁

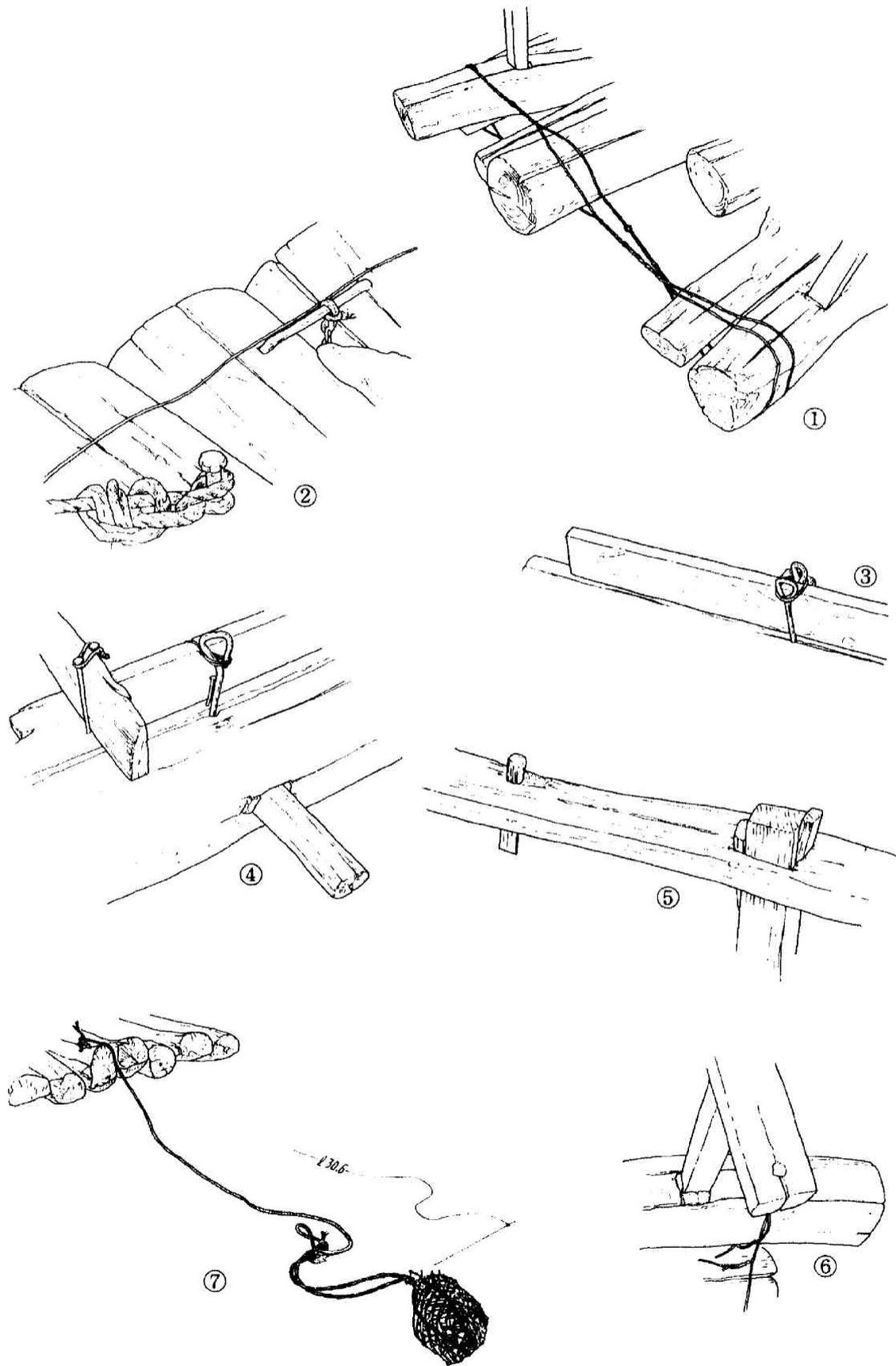
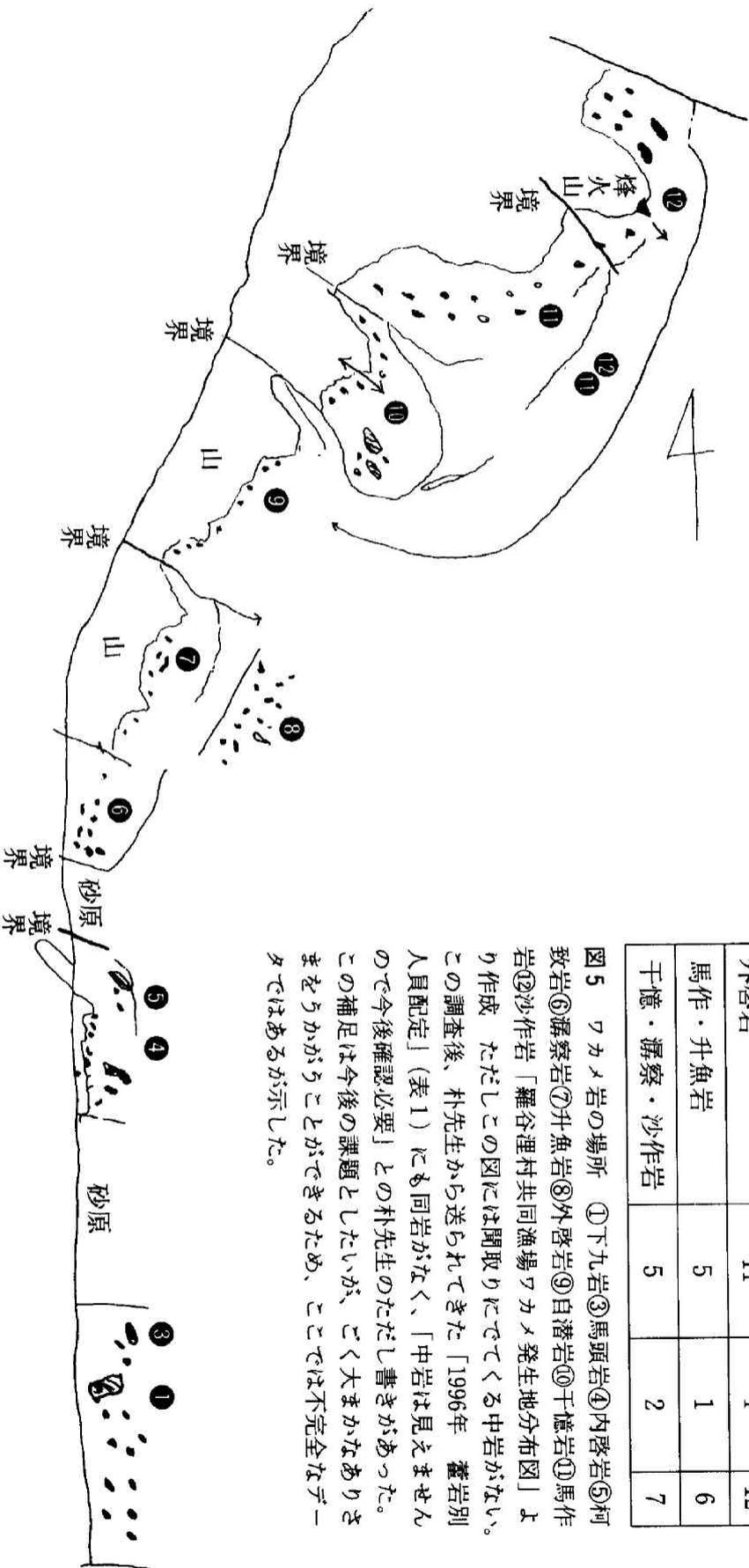


表 1 1996年の羅谷の礫岩別人員配定

岩	くじ引きによる配定	くじ引き後の追加	計
柯致・内啓岩	5	1	6
馬頭・下九・自潜岩	11	1	12
外啓岩	11	1	12
馬作・升魚岩	5	1	6
干憶・潺察・沙作岩	5	2	7

図 5 ワカメ岩の場所 ①下九岩③馬頭岩④内啓岩⑤柯致岩⑥潺察岩⑦升魚岩⑧外啓岩⑨自潜岩⑩干憶岩⑪馬作岩⑫沙作岩「羅谷埋村共同漁場ワカメ発生地分布図」より作成 ただしこの図には聞取りにでてくる中岩がない。この調査後、朴先生から送られてきた「1996年 礫岩別人員配定」(表1)にも同岩がなく、「中岩は見えませんでした。今後確認必要」との朴先生のただし書きがあった。この補足は今後の課題としたいが、ごく大まかなありさまをうかがうことができるため、ここでは不完全なデータではあるが示した。



持管理は、はかばかしくないように思う。

●筏はほとんどワカメ漁のために使うが、かつては筏でサンマの手づかみ漁と、カニ漁を行っていた。カニはブルケ(블게)方言名であり標準名を特定し得ていない。比較的陸寄りに棲むカニだという)というカニを釣る。これはこのむらの沖での漁である。筏の両横(長辺)に各々三つくらいの籠(図16)をつるす。エサはノレミという各々が釣った魚で、筏の前後(短辺)から石の碇を入れて筏の上ですわって待つ。五、六分たったらあげる。麦がみのる頃がカニの身がしまっておいしく、一番の漁期であり、海が黄色味をおびるような夜によくとれた。二十年前くらい前にカニが減り、この漁はほとんど行なわれなくなった。海の汚染が原因ではないだろうか。

●その他の漁としては、このむらでは、まず定置網漁があげられる。主にカタクチイワシをとっており、十年ほど前まで行なっていたが、今は労働力不足でできない。ほかには、タコの延縄漁、カレイの一本釣漁など。かつてタコは多かった。十貫くらいの大ダコもいた。このむらの沖は底が砂で、そういうところではタコは這わずに浮いている。その浮遊中のタコを延縄でとる。ウキはコルクの皮、枝縄の間隔は約一尺で、四、五センチのカエシのない釣針を使った。また、カレイの一本づりは天ビン(腕四つのもの)を使う。

南斗七氏と里長さんからの話の大意は右記のようなことがらだった。二時間半ほどの聞取りの後、私達はお二人に札を述べ、宿を捜すため車で少し南に走った。宿をさがしおちつき(一室二万ウォン)、夕食後ノート整理。

#### ワカメ漁

翌十一日は朝六時に起きる。宿の窓から原子力発電所の建物が見える。曇空、少し風がある。朝飯を食べながら李先生が羅北に電話を入れてみる。風が強く、筏が出せるかどうかかわらないとのこと。それでもとりあえず羅北に行



図6—① 羅北の浜。耕耘機のバッテリーで筏を引きあげることもある。山際に耕耘機とログロが置かれている



図6—② 筏をこぎ出す。ナツテ、カルギが筏に見える。筏の内部の枠はワカメが外に流れ出ないための配慮である



図6—③ ワカメ採り。右に海女がみえる

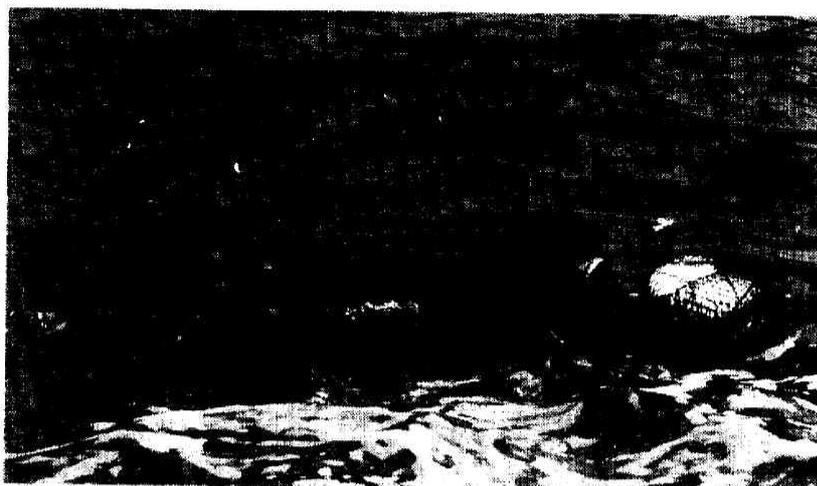


図6-④ 海女。ウキは発泡スチロール



図6-⑥ これも筏で使う。磯の岩にかけたり岩をおしたりして筏の動きをコントロールする。キルギ(플기)先端部



図6-⑤ 筏にあげられたワカメ

き、南氏宅で漁具や筏造りのための道具を見せていただく。一時間ほどして、竹辺から海女のおばさんが来る。波があるのだが、磯の近くに筏を出しワカメを採ることになった。

前日の浜に向かう。浜の筏は六艘とも桐材であり、最も古いもので造られて十年ほど経ている。近くに桐材のとれる山林がないため購入した桐材だという。本当は杉がいいんだが、このあたりは杉は手に入れにくいと、南斗七さんが、五十余年ぶりという日本語で話してくださった。六艘とも大きさは大差なく、いずれも長辺（横）は三メートル前後、短辺（縦）は二メートル弱。十日に、一時間ほどのなかで大まかに計測した図を図7、8、13に示している。

この時、筏を浜から海に出すために、筏を貫通している横木（セキョンイ 새경이、図3参照）に棒をあてがって方向を換え、波うち際まで押していった。波うち際の磯の岩に金具を打ってロープを通し、浜の鉄製のロクロにつなぎ、そのロクロの側に小型耕耘機を置き、そのバッテリーを動力にして筏を引きあげることもあるという。そのあげおろしのため、浜から磯の岩にいく本ものロープが張られている。

浜のすぐ前の磯のため、海女のおばさんは先に海に入ってワカメをとり始めている。筏には二人が乗りこみ、一人が櫓をあやつり、一人はナッテでワカメをとる。これは頼んで行なってもらっただけに、筏での操業状態を見せてもらったらすぐに陸にあがってもらった。時間にして二十分ほどのことだった。

それから羅北のむらの人達にお礼を述べ、蔚珍に向かう。海女のおばさんが竹辺まで便乗を頼んできたので、四人で羅北をあとにする。

#### 洋亭の筏船

帰路再び蔚珍の郡役所に寄る。この時は水産課の課長さんがおられた。鬱陵島出身の四十歳代と思われる年配の方である。

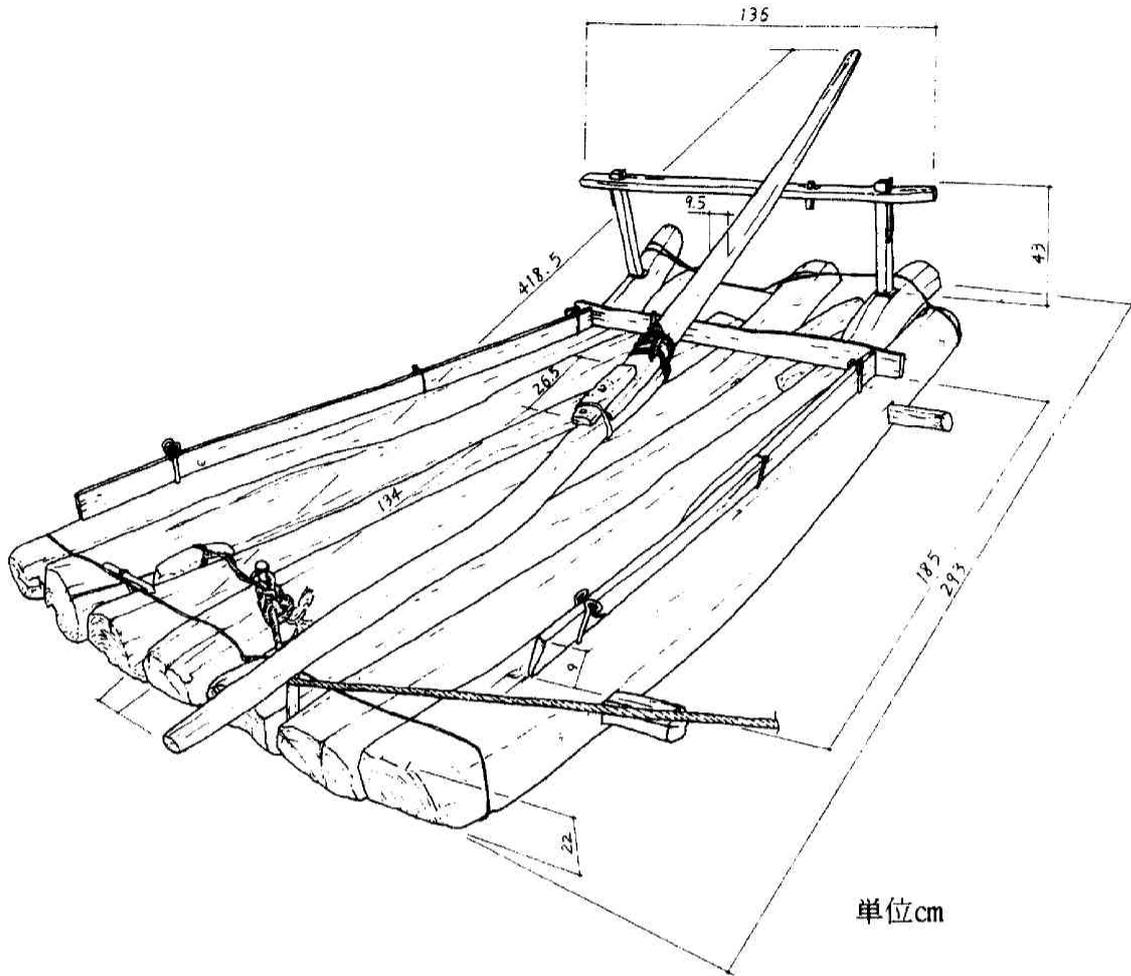


図7-① 羅谷の六艘の筏のうちの一艘のスケッチ

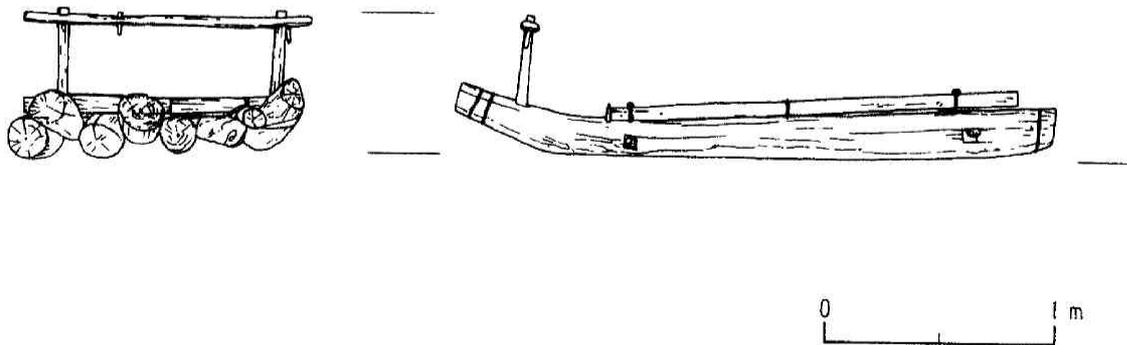


図7-② 羅谷の筏。六艘のうちの一艘

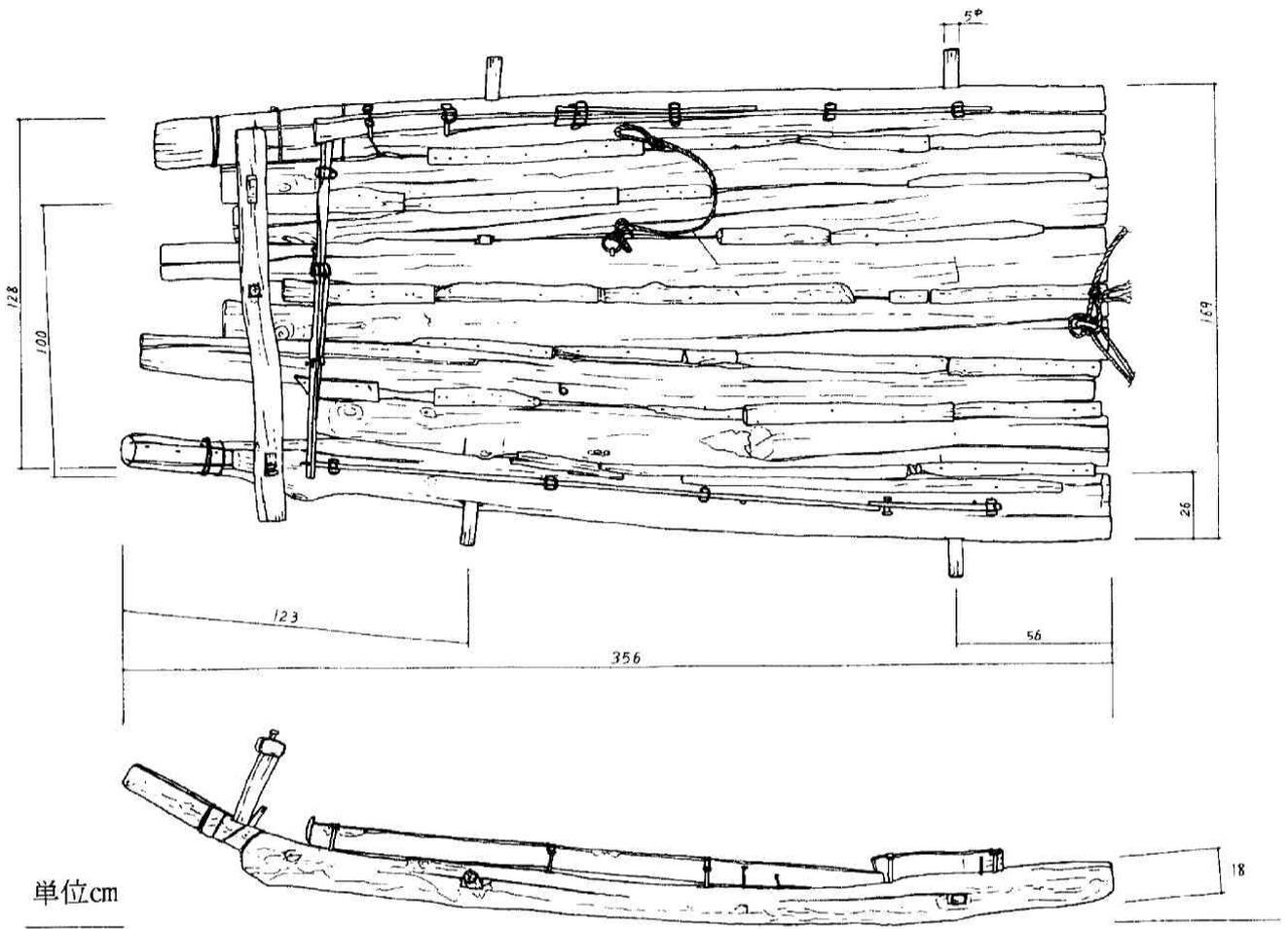


図8 羅谷の筏。六艘のうちの一艘。桐材のすきまに杉の小片がいくつも打ちつけられている

慶尚北道羅北の筏船とワカメ漁

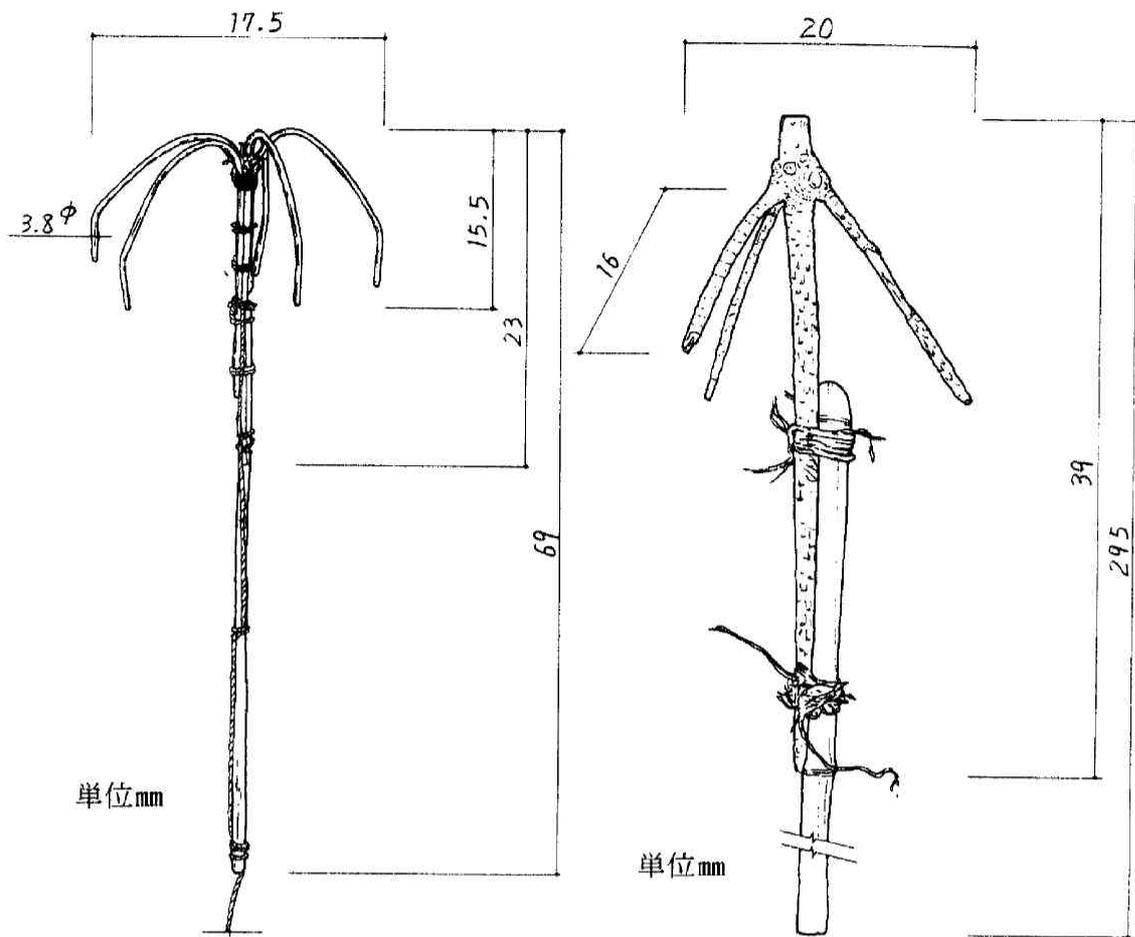


図9 ワカメを引っかけるカルギ (칼기)。先端は木の枝、柄はマダケ。柄の長さをつぎたしたり変えたりして調整する。流れるワカメを引っかけるため縄をつけたカルギもある (左)。この図のものは先端にハリガネを使っていた。南斗七宅にて



図10 羅北の浜で筏を実測していた時、カルギを手にしたおばさんが二人通りすぎた。その浜のすぐ南の磯で、岩の上からカルギで流れワカメを採っていた

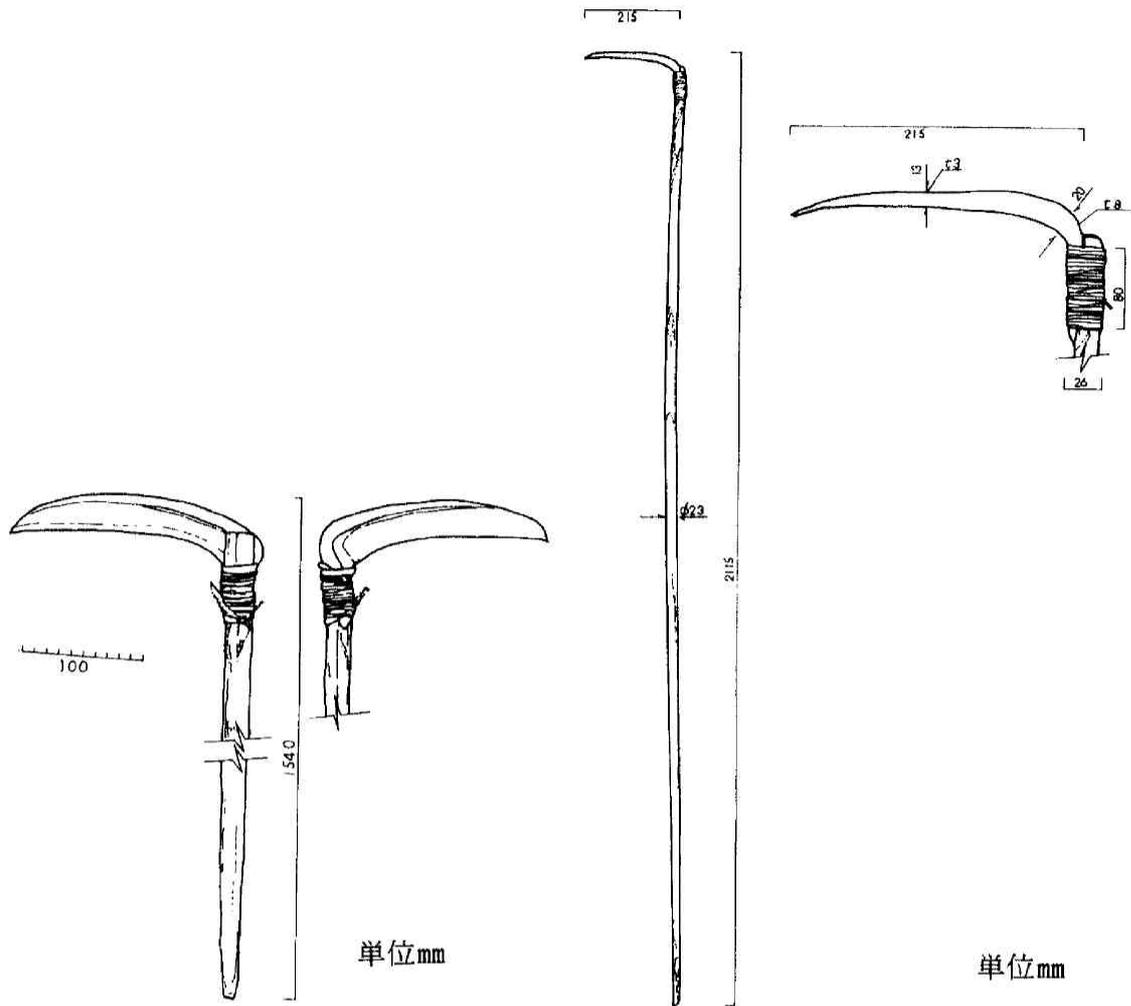


図11 ワカメを切る鎌、ナッテ (낫대)。右は南斗七宅  
左は羅北の浜で。柄の長さは継いで調節する

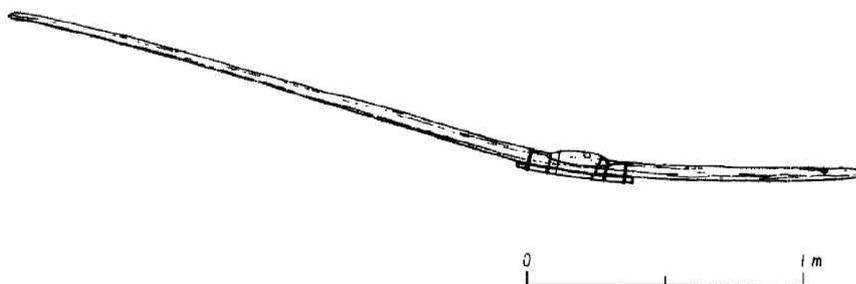
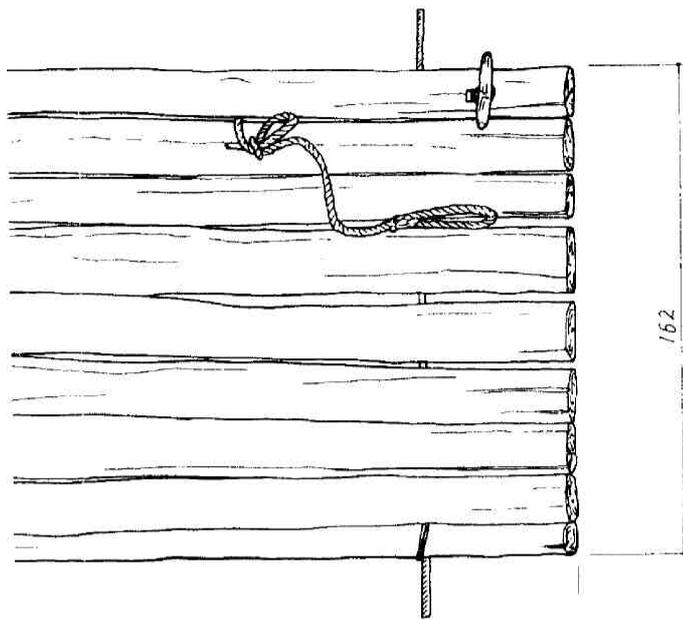


図12 洋亭の筏の槽 (노예)



単位 cm

336

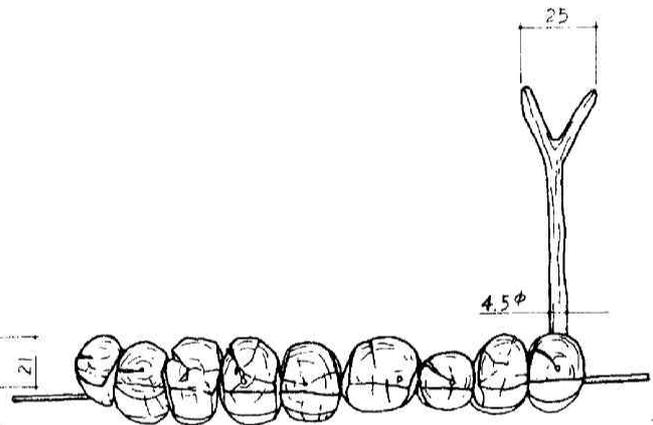
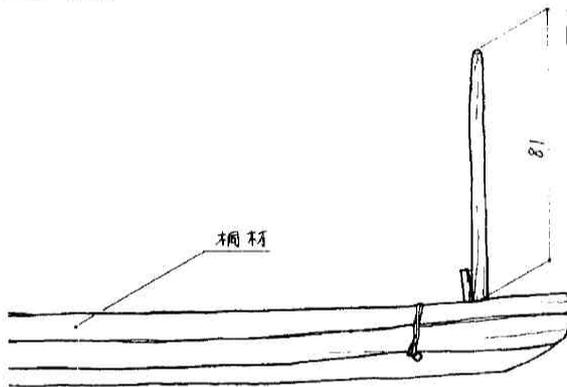
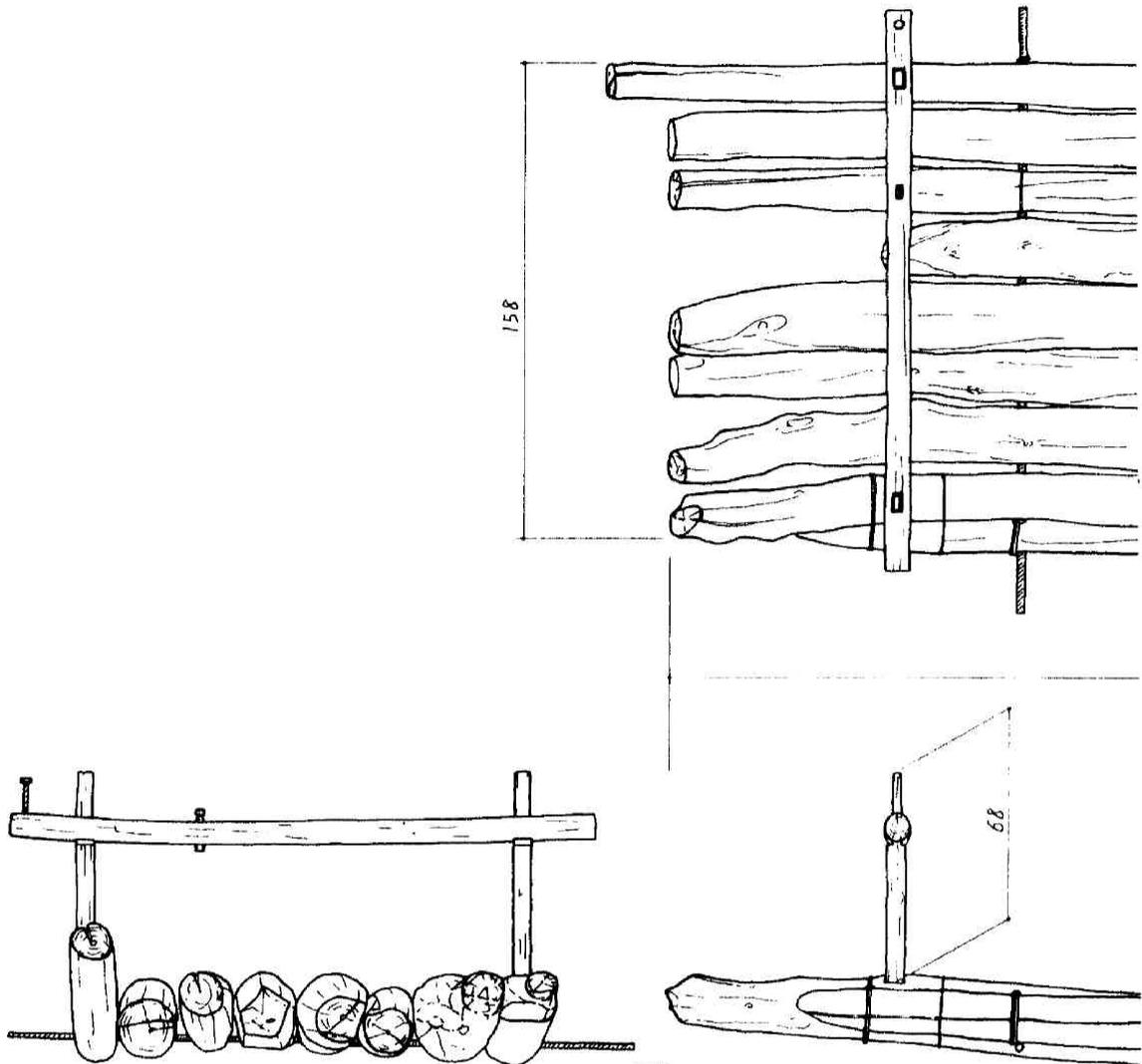


図13 洋亭の筏の一艘。本体の桐材を貫通しているヌキのみ鉄材、おそらく建築用鉄筋

慶尚北道羅北の筏船とワカメ漁



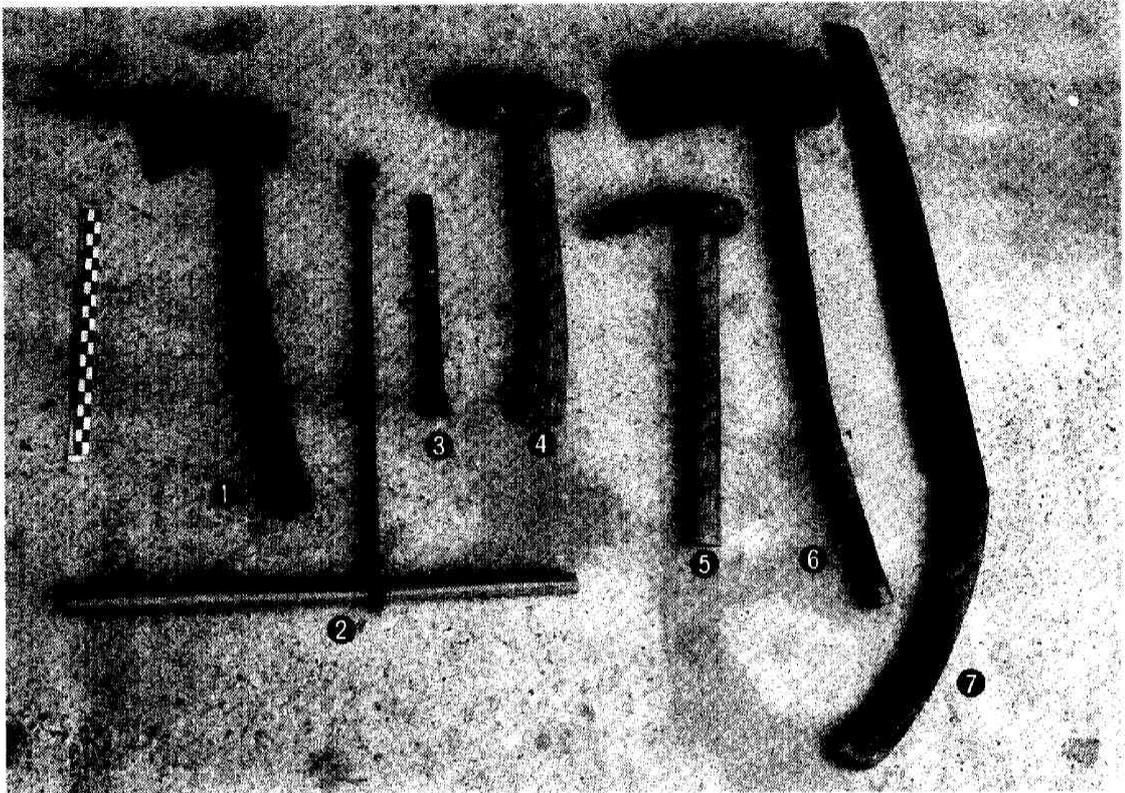
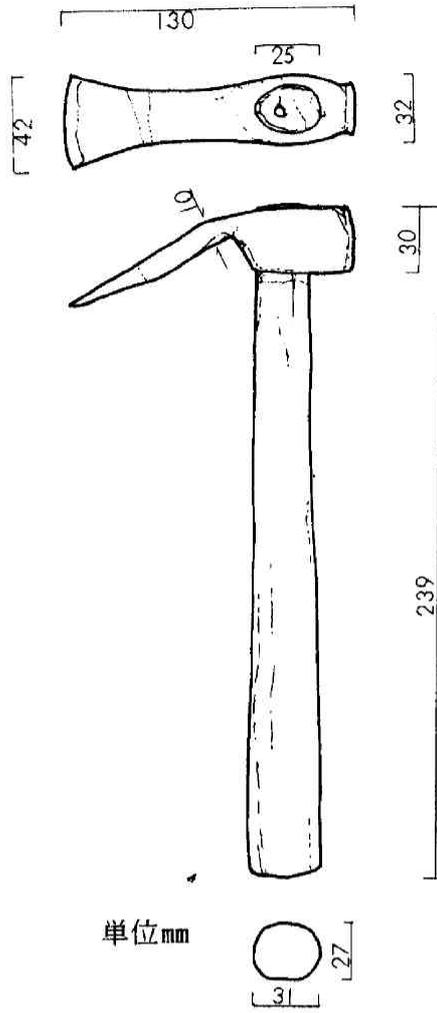


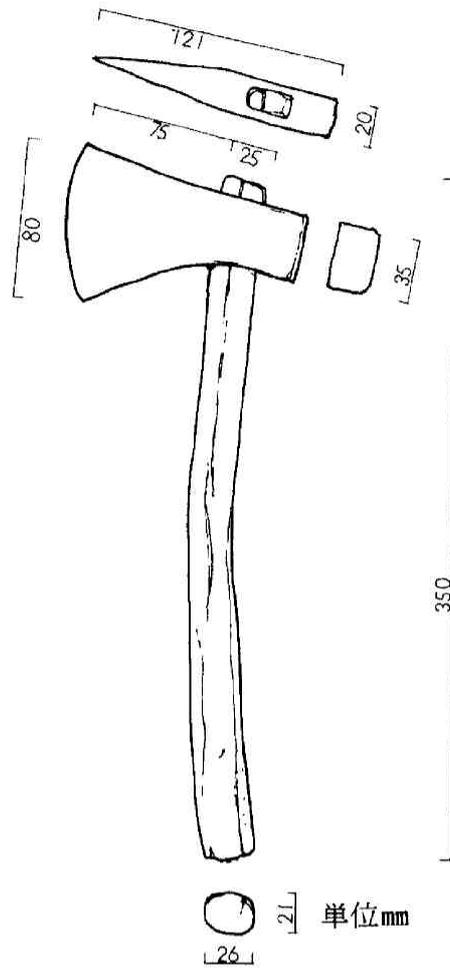
図14 筏を造る道具 (南斗七宅) ①トゥキ (トギ) ②ソ  
ンコツ (舎突) 柄はとりあえずつけたもの ③クル (髯)  
④マンチ (망치) ⑤ジャクイ (자귀) ⑥ドキ (トギ) ⑦  
トッブ (髯) 横挽、歯の頂点間7ミリ

図15一次頁上右 トゥキ (図14の①)  
上左 ジャクイ (図14の⑤)  
下 ドキ (図14の⑥)

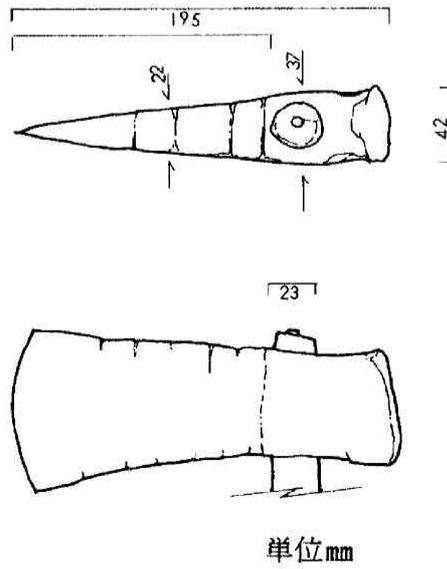
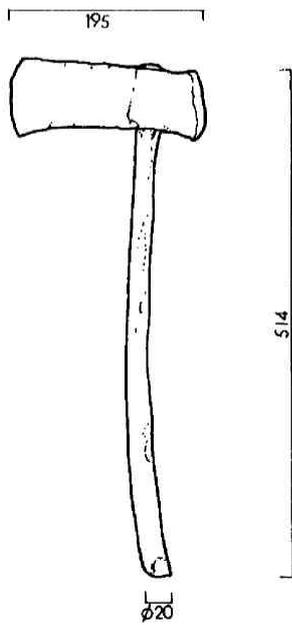
慶尚北道羅北の筏船とワカメ漁



単位mm



単位mm



単位mm

この課長さんから、

・鬱陵島にも筏船がある。これは桐材の筏で、この島は杉、桐が多かったが、桐は下駄の材料になるということで、昔、日本人が勝手に伐り出した。材のまま日本にも送ったが、現地でも下駄を作っていた。

・この島で筏は主にワカメの採取に使うが、島内の近距離の交通手段に利用することもある。

・二年ほど前、筏船で鬱陵島から竹島に探検に行こうとしたことがあった。筏を二層にして炊事場も作り出かけたが突風のため途中で失敗した。

といったような話をうかがっている時、職員の一人在、なかにワカメとりの筏船の写真が載っている郡のパンフレット（『蔚珍』一九九五年刊）を持ってきてくれた。羅北のほかにもこの近辺に筏船を利用しているむらがあるという。すぐに役場の車に先導してもらいそのむらに行く。洋亭（ヤムチョン）というむらだった。このむらの浜に五隻ほどの筏船が置かれ、横に牛がのんびりとした顔を潮風にあて、つながれている。民家の塀には解体された筏材が並んでたてかけられていた。

五隻のうち一隻は表面にベニヤ板があてがわれている。また一艘には羅北で聞いた油入れの容器が、筏の杭にとりつけられていた。

大まかな計測をすませたあと、釜山に向かった。途中で食事。ニシンの刺身を食べる。釜山に着いたのは午後六時半だった。

一泊二日の駆け足の羅北行きであり、筏船そのものの調査というよりも、筏船がむらのなかでどのような形で使われているかをかきまみたにとどまる。筏という素朴な構造の船が、その頑丈さと簡便性ゆえに発揮される機動性が、ワカメ採りに適しており、それが今も使われている様子のひとこまを見たにすぎない。

慶尚北道羅北の筏船とワカメ漁

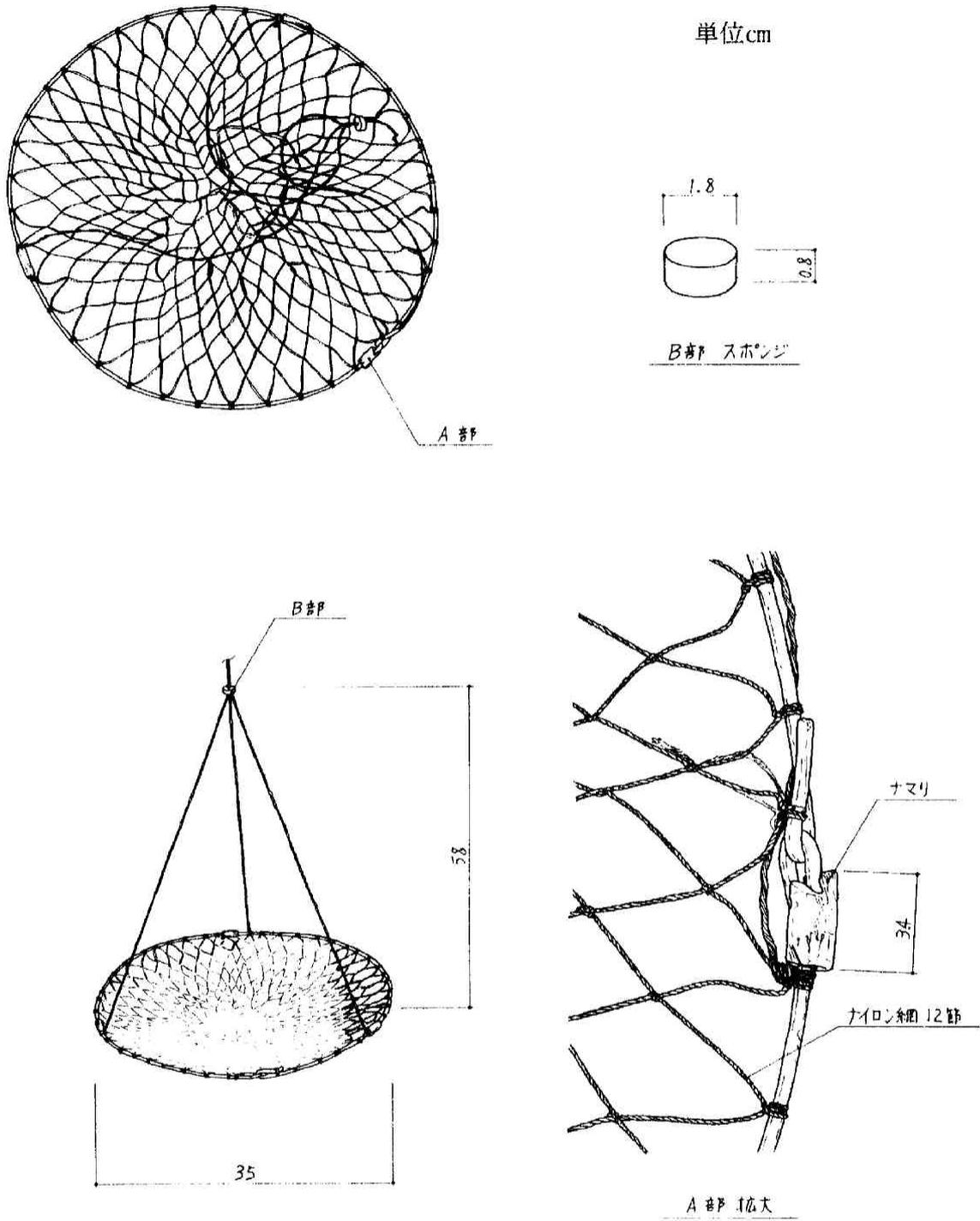
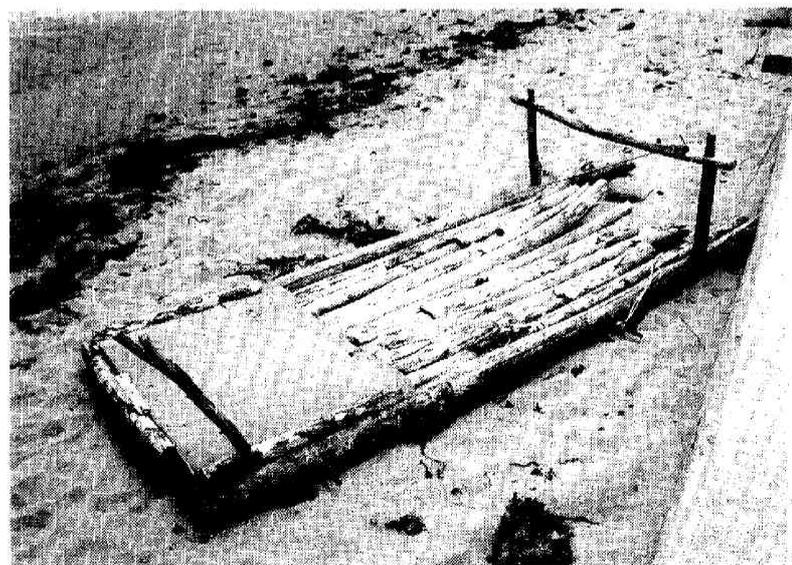
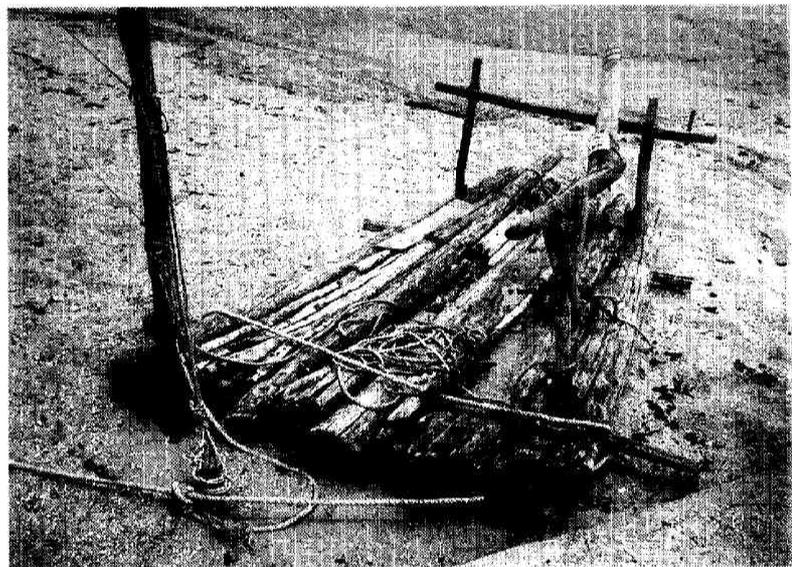
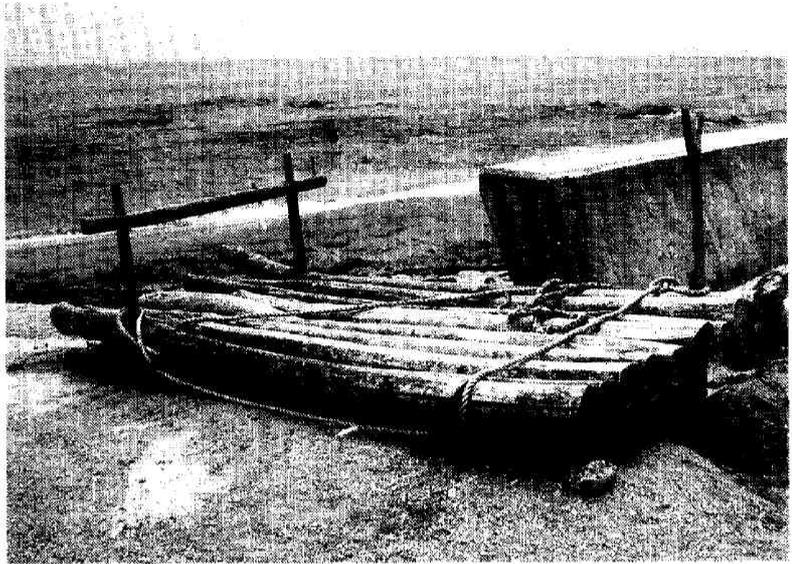


図16 筏でのカニ採りに使うケッテ (ケッテ)、本文参照、南斗七宅で



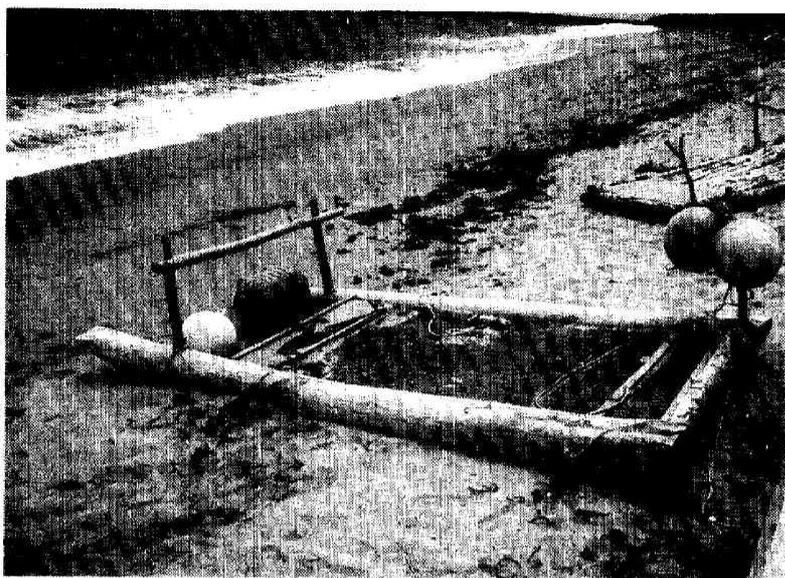
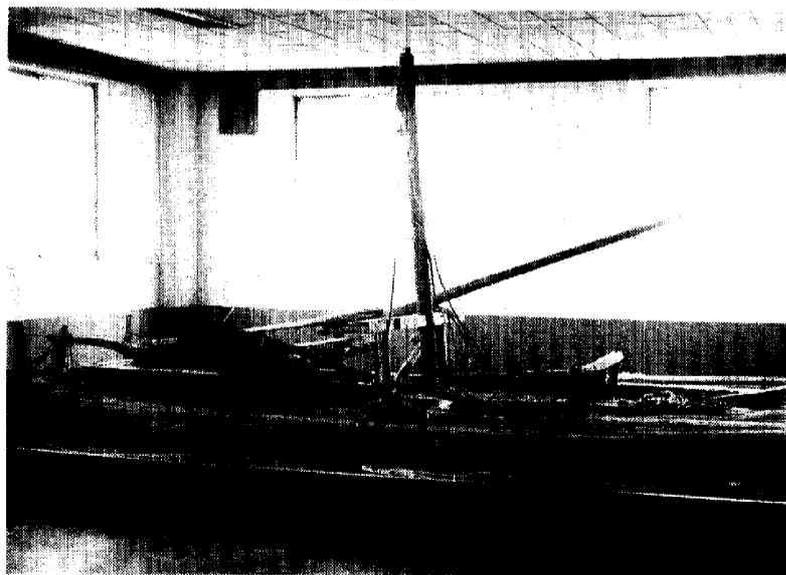


図17 右頁および上二点は洋亭の筏船 ベニヤ板を張っているものもある。左は油を入れておく容器、これについては本文参照。この容器はノーチゲ（ノジゲ）という棒に固定されている。下は釜山水産大学に所蔵されている濟州島の筏船、十二年ほど前に収集、杉材



むらにおけるワカメ岩のありかたは、漁村社会における漁場の占有権の問題として興味深く受けとめたのだが、韓国と漁業権の成立経緯や性格が大きく違う日本の漁村の例しか知らぬ私にとって、現在のところこれ以上深く記述する力はない。

ともあれ、現行の国内調査のあいまを縫って、こうした形での韓国漁村調査をしばらく積み重ねていこうとしている。これはそのスタートの時点での覚え書きにすぎない。

帰国して二カ月ほどたった時、朴先生からお便りをいただいた。韓国で刊行されている『国際新聞』の七月八日付の紙面に江原道正東津の筏船が紹介されていたのでさっそく調査に出かけられたとの由。

「七月十二日李相高先生と航空機で江陵に行き、同日正東津の筏船を調査しました。同地には合計十隻があつて皆現用されているものでした。同地でトマクベ(토막배)という名称があるということも確認しました」

さらに翌日は三陟郡の筏船を調査されたことが記されていた。

この時のことは、羅北での報告も含めて『水産業史研究』第3巻(一九九六年、水産業史研究所)にレポートされている(『토막배에 관한 調査研究』朴九秉・許成會・李相高)。

## 註

(1) 宮本常一『日本文化の形成 下』(一九九四年、筑摩書房)一六五―一六六ページ、これは「海洋民と住居」と題された講演の中の表現である。なお本書は一九八一年にそしえてから刊行されたものを文庫化にあたり編集した形となっている。

(2) 出口晶子『日本と周辺アジアの伝統的船舶——その文化地理学的研究——』(一九九五年、文献出版)このなかの第3章 日本海、東シナ海沿岸の筏船と漁撈

- (3) 野村史隆「済州島の筏船」『民具マンスリー』第二十二巻三号（一九八九年、神奈川県日本常民文化研究所）所収
- (4) 出口晶子前掲書
- (5) 漁村契については『日韓合同学術調査報告 第二輯——韓国慶尚北道平海邑厚浦里——』（一九八四年、日韓漁村社会・経済共同研究会事務局）所収の第十二章（朴九秉担当）を参考にした。
- (6) この引用は、朴九秉『韓国水産業史』（一九六〇年、太和出版社）一一九ページによる。

この調査レポートは本文にあるよう朴先生の調査に同行をお願いした折のものだが、とりまとめにあたって用語その他で様々な御教示を受けた。深く御礼申しあげたい。また、この調査のとりあえずのレポートとして『民具マンスリー』第二十九巻三号（一九九六年）に「韓国・慶尚北道の筏船」という題の短文を載せていることも付記しておきたい。

（かつぎ・よういちろう 民俗学）